

山田外務大臣政務官 基調講演

日本・オマーン関係：

海がつなぐパートナーシップ～オマーンの大きな潜在力を引き出す～

スナイディ商工大臣閣下，
御列席の皆様，

アッサラーム・アライクム。

第5回オマーン経済フォーラムを主催していただいたオマーンの温かい歓待に対し、日本政府を代表して心から御礼を申し上げます。また、ゲスト・スピーカーの一人としてお招きいただきありがとうございます。

今回、オマーンを初めて訪問できたことはこれ以上なく光栄なことです。美しい自然と、温かく寛大な人々が平和的に共存する場所として名高いオマーンですが、これは、日本の共通項の一つです。オマーンの方々と日本人がこれほどまでに親密な感情をお互いに対して抱く理由の一つはこうしたことにあるかと思えます。

東日本大震災の後にオマーンから頂いた寛大な支援はこうした友情の証です。先般、東日本大震災発生から5年が経ちましたが、この深い御厚情に関する記憶は決して消えることはありません。

このような日本とオマーンが相互に抱いている親密な感情の淵源は、我々の長い歴史に辿ることができます。オマーンは、アラブ世界で最も長い歴史を有する国の一つであり、そして、アジアとアフリカを繋ぐ戦略的な場所に位置しています。

こうしたことから、オマーンは、古来より長い期間にわたって、海洋国家としての名声と繁栄を維持してきました。19世紀にはオマーンの統治は東アフリカにもおよび、その海洋帝国の勢威は頂点に達しました。

日本も海洋国家として2000年の歴史を有しています。確かに日本は小さな島国ではありますが、我々の先人達は未知の領域で新たに挑戦することに決して怯むことはなく、また、常に勤勉でした。

そして、他の海洋国家と同様に、我々は、開かれた精神に基づく交流・協力・

交易は「ウィン・ウィンの関係」に繋がるということを経験から知っています。

こうした要素によって日本は、世界でも最も発展している国の一つとなったのです。端的に言えば、日本とオマーンは「海洋国家としての誇り」と「開放性の希求」を共有しているのです。

日本はオマーンの大きな潜在性を引き出す上で、信頼できる理想のパートナーになることができます。日本によるオマーンにおける種々の実績がこれを証明しています。

海洋国家は、進取果敢であり、オマーンも当然例外ではありません。オマーンは現在経済を多様化するという大胆な取組を積極的に進めています。そして、この過程において日本は主要なパートナーを務めてきました。

これまで日本の企業は、石油・LNG分野に進出し、LNGプラントやLNG船を建設してきました。例えば、オマーンにある3つのLNGプラントはいずれも千代田化工によって建設されました。

更に、三井物産は、オマーンで最大の3200メガワットの電力供給能力を有するイブリIPPを受注しました。完成すればオマーンの水需要の30%を満たすことができます。

また、伊藤忠はオマーン最大の日28万トンの供給力を誇る淡水化事業であるバルカIWPの建設を寿徴しました。

先般、住友商事によって完工したグブラIWPは一日に18万トンの供給力を有します。

これらふたつのIWPを合算すると、日本の企業によって約197万人の水需要を満たすことができます。オマーンの水需要は415万人なので、日本企業がオマーンの水需要の約半分を満たす計算になります。

我々は日本の強みいかしてオマーンに貢献を行ってきています。日本の高い技術力と日本人の誠実さによって高品質で安全・安心な製品を供給してきています。我々には、完璧を追い求め続ける「職人氣質」の伝統が深く根付いています。皆さんの多くは日本製の車をお持ちかと思えます。自慢をするつもりはないが、日本車は乗り心地がよく、使いやすくそして壊れにくいです。これが

「メイド・イン・ジャパン」の品質です。

「安物買いの銭失い」、このことわざの基礎にある精神は日本において何世代にも亘って継承されています。これは、安さよりも品質を重視するという考え方です。我々は、高品質のものは長く保ち、経済的にもより合理的であるということを経験からも知っています。

新しい協力分野についても述べたいと思います。

昨年、マスカットにおいて Gulf Japan Food 基金が設立されたことに心からお祝い申し上げます。この基金は、日本と GCC 諸国から農業分野に約500万ドルの投資を行うものです。本基金は、中東地域における日本製品の輸出促進、及び、農林水産物産業の育成を目的としています。日本及び GCC 双方において、大きなインパクトを与え得るものです。

世界中で注目が高まっている和食。和食は、その豊かな食材で有名です。2015年の日本の農産物・食品の輸出額は、7,452億円であり、前年に比べて21.8%も増加しました。これは、この分野における大きな成長の潜在性を示すものです。日本の熟練の技術をもって、中東地域に日本製品の食のバリューチェーンを創造する。私たちは、オマーンがその重要な一角となることを望んでいます。

既にオマーンは日本企業と連携し、いんげん豆とメロンを栽培して日本に輸出しています。また、長い海岸線を有するオマーンにおいて漁業も重要な産業です。

こうした分野での両国間の一層深い協力により、オマーンは技術移転、雇用創出、そしてもちろん素晴らしい日本産品という果実を得ることが出来るでしょう。日本の技術を活用し、私たちはオマーンに食のバリューチェーンを整備したい。そうすることで、日常的に日本のイチゴや神戸牛を楽しんでいただけるようになるのとていただきたいと思います。

新しい経済、新しい産業、新しい雇用が中東地域に創出されます。これは、革新的取組です。

最後になりましたが、中東地域の安定を実現する上での協力の潜在性について、簡単に触れたいと思います。

中東地域は現在、I S I Lの脅威、イエメン、イエメン情勢等、数多くの困難に直面しています。物事をより悪化させるのは、こうした困難が互いに結びついてしまうことです。しかしながら、これらの課題に取り組むことは、これ以上ないほど急を要しています。中東の安定は、世界の、そしてもちろん日本の平和と安定にとって不可欠です。

私たちは、テロがはびこり、社会構造を脅かすことを許し続けることは出来ませんし、国家がばらばらになり、統治の空白が生まれることを望みません。それは、国際社会の健全性の土台に対して、計り知れない衝撃を与えるものです。

かかる状況の中、私たちは、カブース国王の御指導と寛容の精神を持つ国民の支持の下、オマーンが地域の安定のため果たしている大きな役割に対し、心からの敬意を表します。

特に、イランとの関係は歴史的に強固なものです。オマーンは、核交渉のプロセスにおいて非常に重要な役割を果たされてきました。また、イランとオマーン間のガスパイプライン建設は、完成すれば、二国間の経済関係を強化するのみならず、イランを地域に取り組むための触媒となり、より広い地域で、より大きな安定を導くことになるでしょう。日本企業が、いつかこの重要なプロジェクトに参加することを望みます。

日本は、オマーンと素晴らしい関係と有していることを喜ばしく思っており、幅広い分野でオマーンと協力する明確な意志を有しています。

今年は、G7 サミットを主催し、安保理非常任理事国を務める日本にとって非常に重要な年です。これらの有意義な機会を大いに活用して、オマーンと協力しつつ、地域の課題に全力で取り組む考えです。

今回のオマーン・エコノミック・フォーラムが、日・オマーンの両国関係を後押しする機会となることを期待するとともに、オマーン経済分野に更なる発展と成長をもたらすことを祈念し、私からのスピーチとさせていただきます。

御静聴、ありがとうございました。シュ克蘭・ジャズィーラン。